

随想

外資系企業で働く 地理学科卒業生の進路選択の一例

滝澤 宏子

近年「グローバル化」や「グローバリゼーション」という用語は、もはや注釈なしに日常的に使用されています。小学校でも英語が必修科目となり、英語を公用語とする日本企業も出てきました。また、米国やヨーロッパ系だけでなく、アジア系の外資系企業に勤務する日本人も珍しくなくなってきました。

このような中、日本で外資系企業に勤務している私の経験が、地理学科卒業生の1つの進路選択オプションとして何かの参考になれば幸いです。

私は地理学科および大学院を卒業後、日本企業に勤務。米国の大学院へ留学後、1995年から米国系IT企業で、ソフトウェア製品を英語から各言語にローカライズ（現地語化）する部門のプロジェクトマネージャとして勤務しています。

プロジェクトマネージャは、スケジュール・コスト・品質のバランスを取りながら、社内の開発部門や品質管理部門、サポート部門、マーケティング部門、社外の翻訳会社などのパートナーから成るプロジェクトチームの力を結集し、各言語版のソフトウェア製品を作っていきます。

対象言語は製品により異なります。私は日本で勤務していますが、対象は日本語だけでなく、仏語、スペイン語、ドイツ語、イタリア語、中国語、韓国語、ブラジルポルトガル語、ロシア語、アラビア語、タイ語など40ヶ国語以上にわたることもあります。その製品が売れている国もしくは売れる可能性が高い国の言語が対象言語となるため、国の勢いを肌で感じる瞬間でもあります。

米国系企業ですが、ローカライズ部門の本部はアイルランドにあります。同僚はアイルランド、アメリカ、日本はもとより、ヨーロッパ各国（英独仏伊スペイン、チェコ、ハンガリー、セルビア、ノルウェーな

ど）、中国、韓国、インド、エジプトなど世界中にいます。このため、主にメールや電話、チャットを使ってコミュニケーションを行い、Wikiなどのツールを使って情報共有をしながら、英語で仕事を進めていきます。自分の考え方や提案をいかに相手にとってわかりやすく伝え、プロジェクトを前に進めていくことができるかに日夜奮闘しています。

一方、思いもかけない視点や考え方に驚いたり感心したりすることも、この仕事の楽しみの1つです。チェコ人の同僚が、子供のとき初めて海を見たときに「なんて大きなきらきら光る湖なんだろう」と驚いたというような話を聞きながら、思わず世界地図が脳裏に浮かぶこともしばしばです。

時差の影響を軽減し、時間やオフィススペースをより効率的に使用するため、在宅勤務も奨励されています。私も5年前から週に2-3日は自宅で在宅勤務をしています。

以下に在宅勤務のある1日をご紹介します。

7:30 A M — PCを起動し、在宅勤務を開始。主に昨夜からのメールの確認と、米国とのメールのやりとりや電話ミーティング。米国の同僚が帰る前に確認できれば1日分前倒しで進めることができるので、眠いが気合を入れて確認。

10:00AM — コーヒーブレイク後、集中して資料を作成。

12:00PM — 新聞朝刊と「笑っていいとも」を見ながらランチ。

1:00PM — 在宅勤務を再開。日本や中国、インドとメールのやりとりや電話ミーティング。

3:00PM — コーヒーブレイク。夕食の準備も一部すませる。

4:00PM — 主にヨーロッパとメールのやりとりや電話ミーティング。

7:00PM — 在宅勤務をいったん終了。夕食後、家事、入浴、明日の準備などすませる。

11:00PM — 米国、ヨーロッパ、アジアの3つの主要タイムゾーン全員が参加する電話ミーティング出席のため在宅勤務を再開。

0:00AM — ミーティング終了後、PCをシャットダウンし在宅勤務終了。今日もお疲れさまでした。

転勤は原則として本人が希望し、受け入れ先と現在の部門の上司が同意しない限りありません。私の場合、入社以来、上司が退社するまでの10数年間は同じ上司につかえました。一方、組織変更は頻繁に行われます。多いときは1年に数回変わったこともありました。会社の都合で心ならずも退社を余儀なくされた同僚を涙とともに見送ったことも1度や2度ではありません。

そんな中、家族や友人、上司・同僚のサポートや運にも恵まれ、今まで何とか仕事を続けてくることがで

きました。世界のいろいろな国々や人々についてもっと知りたいと思い地理学科に入学してから、こんな形でそのときの願いがかなうとは夢にも思っていませんでした。

今日より少しでも良い未来を次世代に引き継げるよう、これからも新しいことにチャレンジし続けていきたいと思っています。

たきざわ・ひろこ

33回生